



元禄

枯尾華

上



阿心菴永機編
其角堂機一校

枯尾華 下

芭蕉傳燈之家梓

芭蕉翁終焉紀

もねやのちるもちかから重くおのれと
涌く心し泉石珍くも納涼の
地をすに湿氣をうけしおを移す
を次歌もつけしりむちやうあひを
居る腸をつらさうりことかかたあ
るや言のうねをむと母まゝ同樂一乃
おろくちとあしんか便ちくまぬし

今年就中を妻たるりと難あつと抑
 けぬ孤獨貧窮より徳業ありとて居
 ても量ちより二十餘人の門衆を
 ひつと合位ある因と縁との不可思
 議のよきと勤敬ありとて天和三
 年の冬深川の急火の如きよき
 浪みひらり管をうつよとて物のつち
 生のひらき是を玉の徳のそのおち物

おしなるみ如火宅の變をも悟り無所
 住の心を教へて其次のまのまの
 甲斐の根をくわししてゆきのまの
 つきとのそれをもくわししてより下入
 無我といふも昔の徳を立歸りおし
 らぬといふもわくの焼るの舊州の
 居をちかむもわくの心をもある海
 りのちかむも乃芭蕉を枯より雨中吟

芭蕉神の如く益とくあるはひあふで
作らるゝの堪用の交志げくうりあふひ
ちのつゝ芭蕉をみとよめりあふひ
成せその此圓覺も大巖和尚とら
易きなりけりあふひ
けりや或時翁を卦のつゝみん
年月時日を古曆の合せり筮考せし
とあふひ華とらり卦のあふひ是ら

そのの存り風とく雨をまほせし
うあふひ何れ教へ志げく成るは余
し道なきあらりて世にあつたは
くあふひあふひあふひあふひ
潜るはあふひあふひあふひ
あふひあふひあふひあふひ
あふひ信り聖典の端を感
あふひあふひあふひあふひ

魚のあかりとくらのかきよも愁むまの所
 づからゆ橋をり舟を梅下り塔がりむの
 き積ちよと対の浅きとと眼前の奇
 景の控のくちまのくちまをくちまの
 ちりまのくちまをくちまのくちまの
 る事とくちまのくちまのくちまのくちまの
 ちりまのくちまのくちまのくちまの
 りのくちまのくちまのくちまのくちまの

おあいらとくちまのくちまのくちまの
 羽織ひのよきよのくちまのくちまの
 あいらとくちまのくちまのくちまの
 魚とくちまのくちまのくちまのくちまの
 乞向ちよのくちまのくちまのくちまの
 うあいらとくちまのくちまのくちまの
 吹りくちまのくちまのくちまのくちまの
 あいらとくちまのくちまのくちまのくちまの

未のちよるまをしよはるのいふを
 只の一日もあつらふを心氣らつて
 衰城して病序のこ田みありて
 とくもいそん其まよりち洋居所のい
 いこころ深く幻住菴 猿蓑子記 義仲寺
 おゝ所至る処の風景を心の物み
 遊へるつと年あり元來混本寺佛頂和尚
 中嗣法といひて中禪のけしといひ

一氣鉄鑄生ナスいふはひきりも老身
 くらげもすゝ句毎のこひる海はし
 も自然く山家集の骨髓をけり
 ありさやねをいふ人の杜子美と
 もそとやと貧乏人の厚く喫茶の余
 盟つたてを宗鑑の酒も教乃と
 のこつ成て自由躰放狂神世拳つ
 ロくつせし現力に凡篤實のちあり

風雅の妙もしく白ひゆらうやお極ふ
 流き雪々々ひらうくは江戸の石の魚沼
 沖の島のゆかりの枝を引きしりたるを
 さけくこま候因本なる路く兼好三ふん
 西じり高野く寂蓮法師の縁八宗祇
 宗長白川く通載のまゝ居らうきとし
 なくちやうく色蕉翁あついでまほれ
 みえらうやうくといふまゝれり未の境

そのの中くや 奥のあきれたといふ十餘年

記あり

うち抜と筆とをいふまゝは十日も止
 まる所もくもく我胸の中をきた祖
 神のさけうくあふくといはれしなり住
 けりて縁の心か並久庵是る慈法和
 尚のいひの世よあつて縁縁しんくし枕
 ゆちのゆちのゆちをみるおとといふをせ
 めらうく思ひ合せしはらうく遊子うく

生を疑へくしくもなるを
生涯をうつらんと思ひてさよひにる深川の流を
又立出るよう／＼尊や筆教を老を
くもほろ／＼いひをさたりし心持も
かしくもいひかしくもいひかしく
伊賀のちか／＼もなむ／＼と月乃紀を
なまのいひの困りもいひの
いひのいひのいひのいひのいひの

人おまのいひのいひのいひの
とく／＼いひのいひのいひの
九月廿八日膳所の曲翠もいひのいひの
らせしはいひのいひのいひの
の音もいひのいひのいひの
あつし伊賀山の嵐紙帳もいひのいひの
菌の埋積もいひのいひのいひの
けのいひのいひのいひのいひの

七月晦のおどろ床まよつき泄痢度
まげくし物り力もたぐし手足氷めまは
あはれまゝに河つあるくこの中の去来
京より馳くまゝ膳所より正安の大津
より本節し別丈舩平田の屋由つり居
まあし惟終るたぐりる難あまはりあ
おゆるまゝに心神の散乱なると
りおし不憐まゝに近く招

の身はわくの洞居くはるるあ壁を
あしそゝ倉運をける色は年々入ける
あは心弱あはれまゝに

旅の病くまゝに枯れをもけある

まゝに枯れまゝにやまのせまに
やまのけりははえ奇執あつる風流乃
よゝ死んかのるを切し思はくは梅
し八日のおどろく各をけくえり

賀會祈禱の句

落つまはりしふありて秋集や木節
 風のそえんあまきや露のあふ去来
 足らぬまはりの枝やみそさうい惟茲
 初雪まはりしあらん先達の宮正秀
 秋のまはりしあかや雪のよせ之道
 秋よししあみつあけう露れ負伽香
 記さく壺も露お湯等が支考
 あらやほまうきこふ節も吞舟

岨と浪鴨のさきやあまきんん文州
 日あはれしんあけあけと秋の菊し列

是と生節の笑ゆめし木節うまを死と
 ちよあししあけくも實くくあらる
 汗を耻めし坐臥のしあけあけあまの
 吞舟と舎羅しあけあけ道うあしあ
 あしあけあけあけあけあけあけあけあけ
 甲あけあけあけあけあけあけあけあけ

杜

九

こゝろをなほし縁よりきこ師を
 つまひつゝ悦みあはれもかゝのまじの
 あまげとちきいふよらふもさうらう
 冬々々々ひく麻の夜の垢つまふうまを恨
 ろうさふさふさふさ既うにぬの夜乃為
 りねるえ錦繡のさくしふまきせとこのる
 ありそりなまのもれももの面目をり九日
 十月ハもたなくしり角其角 和泉乃

府治の論とらふまゝくまゝいふまゝうは
 し別々らゝせしむるなり一なる一と思ひ出
 らぬはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 らゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 亀のぬいふ舟よりけおの浦心く縁こ
 堀くとも早も十一日の夕人方城と着く何
 心をくおさるのり糸箋束ふれいゝゝ
 みらるれどわさるあゝゝゝゝゝゝゝゝ胸

古尾

十

はらふよとくうけつけし病床こころを
いとんごのよ懐^{ヲモヒ}ちの力あふ色ありを
かこころは年らりの深志の海——
住吉の神のくまのちを物あすわ
のこころもわくしるるわくあはるし
思ひゆくは蟻迹の神の物とらあふ
みこころははるしとく涙せよあけし
うつくしうたをききあふ考のこころよ

あめくゆよ退りし奇味の心をあはる
膝きゆあてし病顔をみるしあはる
あしし死期もきあはるし——

吹井より病を招うん時をうな 晋子

とねおしとあくともあやう先ねお推の
あわりのとびのし幻住庵らうおせよ遠
木曾殿と塚をあしとあはるしあはるし
たのしうらうらあはるし其あはるし

らるるのばらぬくものもあらはに常よとて
まじりたるのあらはなる表とて思ふことら
み
以てのほのまぢりたるはらうあまじし
おのよ業をいひていひていひのよの寝を
しつて居せし

うつくよの業の下乃寒とて
病中のあまじりたるはらうあまじし
去来
川はらうはらう寒よとて声 惟は
志しつて次のよの寒とて 文考

あひおおのまじりたるはらう
正秀
園とて菜飯とてはらうはらう 亦節
皆まじりたるはらう 寒とてはらうはらう 勿

十二日の申此刻とてはらうはらうはらう
睡とてはらうはらうはらうはらうはらう
も檀とてはらうはらうはらうはらうはらう
ら川舟とてはらうはらうはらうはらうはらう
惟は正秀とてはらうはらうはらうはらうはらう

早いのは十人並ぶの早 袖寒よの影の
しらぬをさかひのひとしほせとたぬ かの
あや孫をうめばはては孫孫名らうしめ
年より日だのあめのりーよ河らちやーよ
教をのひりてし御潜の光をうしあひ
ほしとー思ひまのしつわのなむも暮る
昔はしち今ちしつーつ東南西北も招
うねしつもの栖き定ちるはあめのこそや

奥松島越の白山ちるぬそとーしよてく
とあしとひりて寝るくはつらの欲あひん
つねのそとひりて寝るくはつらの欲あひん
あしとひりて寝るくはつらの欲あひん
そとひりて寝るくはつらの欲あひん
はくしつみちる義仲寺ありわしと葬
礼弟信ちと及ー京大坂大津船場の
連気折ま折者とつてつるの情を慕

ふるくくを海邊に作る池ありまの三
百余人に淨衣との如智月とし列の毒
ゆひもて著せまらん則長仲寺乃
直愚よりをみららふよこ川おのが
引人ら所よののよく木多塚の右み
あゝるこ土いあゝるのつゝり
をる柳もあゝるその墓れちまゝん
とこのまゝゝ卯塔をまゝひあゝ垣を

志免を枯のそせほを枯ゝたるのそせ
次常よ風景をこのある癖をりたるを
所らあゝ山田上山をるゝとてはも
さあふよせ漕ゆる舟も初念のゆを
のこゝ樵初の麻田家の雁遺骨を御
よの月みゝるゝりそあゝる翁
ありんて七日う程をるゝゝゝまゝ
追善の真あり幸にあゝるハ早と

くつゝあけあき合感て愚うけ統
 厚の記を残しゆるし程もはなれき風
 のつそは我翁を志のそんまの公を
 回向乃あよりとつを

於粟津義仲寺牌位下 晋子書

元禄七年十月十八日 於義仲寺

追善之誦諧

晋子

ちのよろこもき笠に隠かや枯庵を

温石はあゝ皆 辨るる所 とも考

り竹のわよりきくむ海らや 文州

やももめる土の縁をきこむ 惟存

つみ控し市のちあれも経 水節

はつさであれ 文並のそ 季由

森のちをわのち 月之朝 之道

椽

秋のけの茶の向鶴はし 去来
 ぬの芳田中はあをまきごりり 曲翠
 ぬるる ぬくけはあごり 正秀
 晴のあまごりもあ眉の物思ひ 即高
 ぬのくすりせぬくごのむ 泥足
 こがゆあご餅の豆腐をせ 活ごり し別
 ぬるる ぬくけはあごり 芝柏
 暮るるに 暮るる 句ふ 天氣合 昌房
 車の竹をばごりしごり 探芝

沙月の横る 遠きぬごりり 川 胡故
 眞く 下る 厚あはする 牝玄
 菴のあま 雲いあまのあま 雨 游刀
 あまごりりおはぬるる 蘇葉
 世のもごり集のあまごり 惜よる 智月
 多羅の芽立をとりて 育る 吞舟
 けをとりぬく みのあ 筑紫 借 土芳
 おしぬるる 刀 荷 作る 卓袋
 四下におは 髪を 髪を 御あごり 天椿

苦よちる娘をねるのめん 野童
 一あさくまつひ花を寝せみなり 素髻
 女のあぢきみ 酒 万里
 河舟の思のかり 吹志丸
 誂くあやうし 雀らる 家 這華
 隘賣のこころ 許六
 月のあつこころ 糸 回見
 ねとけ 雛なるこころ 荒雀
 くはまき 鶴 楚江

小屏風の内より 雪が乱し 野明
 四つこころ 起さる 寝る 風国
 福ん^{ニウ}ころよ 草鞋とけ 木枝
 女く 堂み 晋子
 ひららちも 侍氣み 角上
 雪あつた 道
 あまはと 小神目物 去来
 擬きつる 土芳
 春ふる 芝拍

ぬゝんちまらしく ぬんまぬ 卧高
 せんまらしく せんまらしく 尚白
 月こしわさ 門の弁乃 垢離 昌房
 軒のあけ 蓮あき 舟のわく 舟野
 せらのの ぬますりす ぶを 丈艸
 花のさく ちと ちと 旅んを 惟然
 煮く 粥くらめ ちのり 灵椿
 小林 ぬらつ ちと 近よる 堀乃上 正秀
 流滞く ちと 川へ ちと 徳石 回鬼

日みやりく 案の ぬんちまらしく 朴吹
 袋の 猫ちも ちと ちと 角上
 里と ちと ちと 人遠お ちと 寺 泥足
 ちと ちと ちと ちと 所刻 ちと 尚白
 ちと ちと ちと ちと 舟の形 卓袋
 二乗 ちと ちと ちと ちと 團くの 掛 芝拍
 内ちと ちと ちと ちと ちと 探芝
 ちと ちと ちと ちと ちと 遊刀
 け ちと ちと ちと ちと 月と ちと 楚江

水戸の地の名を付 魚光
 社にん 立寄り 十名了 立寄り 人 晋子
 新 しくして 代友 神 教 風國
 折 溢る 水 上 姓 色 引 け 文考
 乳母と隣へ 送る 啼 正秀
 獅子舞の 拍子 ぬけ ある 昼下り 文州
 雨 氣 乃 ち 尾 戸 昌房
 立所 警 備 の 普 濟 を 奉 即高
 行 所 出 り 込 畠 新 田 之 道

多 布 一 の 仕 合 可 り お 昏 の 元 去来
 木 塚 の へ 倭 子 を ゆる 泥足
 三 斗 白 土 尚 日
 袋 卓 袋
 漣 戸 我 々の 天 角 上
 短 小 志 の 小 聖 靈 北 玄
 坊 土 芳
 村 あり あり 伊 勢 講 の 種 芝 拍
 ナラ 暇 あり 小 舞 の 加 減 這 華

軍とありしを祀又くは物即高
 測りぬく蔭塚の上を過るこ 晋子
 乾目もふふこ念珠押もい 正秀
 笑くの意はつらん抱著寒し 文考
 こよふれし替ぬ大小の額 魚光
 味増すしはゆふかをわしせや 楚江
 かふ葦年の何り可ふお 游刀
 ぢららるる恨し物ささらしはら 風國
 都あう酒もさるん酒の酔 之道

白鳥の陰を葛をよほせうけ 探芝
 之河あかりハ天下一 去来
 飯志あう内食もむるあや舟 尚白
 卯者し積をみてもさる北 回免
 ころ寒お塚格子の窓何をも 芝拍
 文庫をあらは 福山伏 土芳
 ほきもみしあ月の日のもさ 惟お
 海もも也お水庫川のころ 夫州
 寮みある外より鎖をうけし 北吉

思ふは怖の奥に戒名と考
青天子ちさうくむのりしはく 去来
巢けし生もちる千里音 正秀

七四十三人満た真行大津膳所
京嗟嘆掛津伊賀之連衆也各
感愁眉而不求巧言也

傷亡師終焉作句 初七日迄

志とねをさるも十おの泪ふ 京ま来
啼うちの相氣をたもせ後衛 傳李由
中ね下氣も寒よととちる 大津木常
つるやちり宗紙もす白おのまお 日し列
りつるも泪をたあや塚のま 膳不昌房
究つ暮をゆるやあも教あ 僧丈艸
了んおの勢もとよとらん帰む 去根許六
風をたみさる後め舟あらん 同紋村

暮のより十をあたせのくぬみ ぞ探芝
 お席みほくあゝかゝのま 大津楚江
 わゝし着の老のま 菅のま 聖田成秀
 木弓柿やあまうけしほの上 大樹の
 日影に 塚よりくれやぬま 日あま
 月雪よせあ体みや 笈の脚 信千那
 志げ繪を紙あまあゆむ 大つ尚白
 了々翁の終りのけし 奥羽塞をのこし
 くらりの呈書をもつらうらふまを
 くらりのあまをくらりのまを
 くらりのあまをくらりのまを
 くらりのあまをくらりのまを

中へくしき同家ゆやまののま 京徹士
 とせぬまの寒と谷よ色ほま 浮角上
 浩然のまうけしと暮のま 京野童
 一おもいし泣あません 日風國
 年よあるまのまもあま 伊賀土着
 悲しきもちししあま 日卓装
 我まの心をほくまの雛のま 大坂之石
 石もくし暮もあまあま 日芝柏
 藤のひもいし野のま 信文考

入内中日の教方の新記 京春沈

十六日香子を幻住庵中へおび
おのゝゝき所といふ推のふきこせき
いおのゝゝき所といふ推のふきこせき

あつしちほきカウツとそ 曲翠

後おしあふきつとふおの 正木

うりこゝしとふきつとふおの 即高

ほぢこみるおの岩とみるおの 沢足

見送りしおの海や船のおの 霊椿

すぬしとほおのふのおのふ 音子

えつんほおのふ 権柳 権柳

線ふおの物屋の枯色蕉 日荒雀

神あつもの千もも帰や塚の塚 大坂吞舟

を芭蕉衣よとけし洞とそ ぞ魚光

立のふし神も 今や墓のおの 日回鳥

悔もぬしおとふあつとそ 日遊刀

おのふしおの廣し 西のら 日扣吹

おのふしおのやとふあつとそ 大木枝

とれおのふしおのやとふあつとそ ぞ這華

けしけの竹もをさすうおの窓 大津土竜
 ちりし珠はもろくお桜のふきまら ぢい海軍
 ちりしんとしとこころの縁のま 日伴元
 体しげと涙みあはす時多し 如和女

二七日廟参之悼白所へ文通

音とくわく酒の光やあけみ山 志多
 小波岸やあはよ白らみおろり 尺草
 みこの目や仰よなまのちるあけ 大坂如柿
 といとや悲しきうらみ柳 ぢい北玄

同まらうとありあふ令也村何あ 日吾我
 木のまらえらせの形やしのま 日松泉
 げしとんりまみんたはし 日朔巫
 菊櫓のん紀り 菟走らお 富路睦
 朝のしげとあはまはし 日重氏
 赤くげと指あまきあ 女素聲
 ちりしとしとんりまみんたはし 女万里
 花もろくせうほまきとてあまき 葉の権治
 む桐のしとんりまみんたはし 女可南

その日襟きりけりも河川 ぎ 徹房

ふきつげもおもゆるも河川 日 麻之

木急の目も涙のしりぬ 日 砂上

力なく墓よりけりも河川 日 蚕鳥

糸柳りぬきもさくら河川 向 震お

枝折れもさくら河川 さ 来儿

水鏡つらむもさくら河川 小 倉因々

幻もさくら河川 さ 有

力あふ獅のあがもさくら河川 若 根木守

朝霧やおぼろもさくら河川 こ の知行

さももあふおぼろもさくら河川 堅 田小作

くまのちり小坊のちやと
作をゆまをん

大根川もさくら河川 京 其木

こ七日伊賀連衆追悼句

あふらあさゆらけもさくら河川 い う玄鹿

そらのみもさくら河川 山 岸車来

けしき迄也もさくら河川 浅 井風睦

寒ら菊やあさくら河川 山 田雪芝

三ツみこり啼たるぬゆけはひ鴨 杉畑肥力
 六るさくこふあはれりり冬のみ 冠山昔蘇
 冬は深川洞のあふあふの草 若草
 中煙うらなみのゆづをうらま 一巻
 ちのふたつてはあていりる古傳子 伏治洞水
 子向せら河をさねる 菊島 西沢魚目
 何や尾のこころを火に焼 尾尻
 冬を枕のまふあふあふの歌 山岸向和
 山茶むの歌ねをさくす世が 木山共筆

借^ツきつるあまのあつらぬ印巾 大坂下
 うらよみの果おもあふの吹たり 猿雖
 芭蕉く枝葉の神のくまふ 小川風妻
 赤の衣の小志ぼくはむあふ 梅田示蜂
 つまをを猿の仕あふのあふ 井つら
 若草のあふあふの洞のあふ 淡寺之
 何よのあふあふのあふのあふ 中尾槻市
 冬をれり側よ小ねり咽きり 小童
 あふらちあふあふのくま枯枝 は子共子

枯きよき歌入るる男舞のふ 糸田作本

笠を冠るるあまのつら 井上

そのまゝに夜をこゝろに 宇多

けしきつてさきも 交保仙杖

歌くまの山もつらや 松平

水その遠よちるや 内神九郎

ふりあはれ 活るる文字の村街 いら半残

ふりあはれ 活るる文字の村街 いら半残

なまのくしの心脚 栗津よりうらこ
七師のまき書おのり

西宮百歳

恨あるうらささうや 満人

ほろりと涙の母の 来川鳥栗

四七日をうけし 普音文通之句

積りの乃神の志くぬや 伊せ海州

そのあこめさきしおまへん 日国交

海くしておのりさきしおまへん 日宗比

ほろりと涙の母の 日宗比

みく位や 蓑笠の像 日半従

ふりあはれ 活るる文字の村街 日吉本

何れも合しとての悲しきおのれは いせ援不
せりそのの等とてちんあられ笠 日産牧
耳の底よ水鏡の心そのの面 尾列高川
梅川柳 一羽をまねてつゝふる 日素覧
あふちりて光あふくふ牡丹は 日九次
ふつゝふるあふくくじ塚の掘 冬雪
のこ峰あみの日影のやなを 大坂伽香
杉飼ふくし川ゆもゆる月お みの低耳
文書とてあめ影し古歌中 伊予黄山

上終

十月廿五日共桃隣出武江而暨

義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

いつのまにの用のうしろむおそめ首のそり
おとてみしれをり春もわたり村よとあ
笠の眠り小菘の病つゝのほ世をふよ
あけえん枯母のあそびのふの風は
つるきとらふのうらなを 其角ハ
ける契あつてや生おのころのなほる

色とりあふつる魚りう遠下境のく
 いまのまうなまひや江都の心さ
 するさあひつ連とこらへな席をか
 まへて追善真ちのくまへ神の鏡よ
 ひりふらひのくせうくあをさ志を
 ちまのくはちみちを寒く
 うけこま月七日のまりつくよの夜
 義仲の辰上や一ひらまつく空華

霧の水月しちいほまの心流るまを
 ひまねと万象うへけ所この
 乃よあのくくくを利し地を利し
 終り其神不竭なるまのくく
 あま

終りまうく終らるる言佛

嵐雪拜

十月廿二日夜魚行

嵐雪

十月廿二日夜魚行

さくらねのちりさ一節の長 水む

溢のよ乃二るハ五里とくま 百里

まねちえんる沖の如以 神夜

の成乃ハつみ白お 山を被 東潮

ま鴉こころひこ豆ありし時 浮生

蜀黍の葉をさそそぐれし細中 卜宅

あなあしそまよこ上をある 舟竹

新川まきこえもつらぬ橋のくく 相雨

あのかさんこ照くさしよ 月下

存まみおをあゆる田植をも 風洗

猪ヶけはくさくさる于鯉^{エヒ} 敷下

物束の茶の湯延してはるり 咸字

赤い菊をう黄な菊を嗅 牧人

上気して吹進みもる 秋の風 多歌

かろこちあゝるこ床をよもる 銀鉤

らゝもも菊よついでおまゝん 東嶽

山吹のちよふ影をますれぬ 毒
 まさあふのちのやうな悪きしし 浮生
 氣おのまらふ時ハみたる 百里
 只わらふ四十一の内の樂坊を 氷花
 ぬ製しししなるはし存 嵐雪
 ろんをて猪よの斬けりり 神赦
 佐牌のふ乃中が静まる 赤原
 志やちよなるま切おし送るし 百里
 珠のゆくは旅ともある 神赦

傘のわらちあまらる傘いなるよ 嵐雪
 あまのあまらる母の氣を 氷花
 わらちなるは吹煮にのみ 赤原
 せんなるのちよ師走あつく 百里
 ちよなるをくくくユむちユあせ 神赦
 中山道ハかゆるし 嵐雪
 一ちよを未の價のしし 百里
 ちよなるもあつと語る 老 氷花
 ちよなるいすつあつ子の墓のむ 赤原

せし常の待りりくらむさ成 緑子

満座追善各焼香

ちのよりのゆるも四季の路の 百里
えおさまのなきいつはち乃比 氷花

悔前非

もなつちる悲いささきさきあすの月 神救
苦しおののあき塚の雪 浮生
風のふとーはるめた墓の内 舟行

るりいれ妙のまの根のたし 咸宇
付也ニなとなむ月あめ 与途
り紅葉のなきさきある 朝既 去原
はらふこのはちをさあさき 味之 素子

芭蕉のあみまのうらなはるる
あはれいなるらんよそつて結る

所居のあつて志はしはみりしと
あなろを芭蕉のあはれ世中 安適

十月廿二日

十月廿二日 真し

好くも多し 旅よとつと逆旅

さああ乃ささりりさかおひよさそ

伊やあまのいよまののわとおとち桃隣

流くうけりよき此日の秋子珊

一面より起ぬ小松ゆやと杉風

よごれしふるも川あまじ 谷水

急なうみぬあくるさしりる 善良

ささりて遊ぶ所の帷子 序志

皂莢は枝を多しる 鷓の羽 太夫

卯五も入ル古梅乃底 亀水

心よふ今の住家を惜しそ 孤を

こまろくしらふ景の澄溪 子祐

け寒さあられ雪のふる曇 利牛

あ綿の重くゆめのせうん 白之

脊を伝へてふさしくもか 蚊足

お角とれそ 蝸のうら 李三

やあくと平泉さうもある月 砂坡

十月廿二日

十月廿二日

丈幅せきふ 布の厚綿 太洛
 去白な陰ハ流るし岸のむ 八葉
 俵のくし魚は 燕あつま 枕川
 ところとみさ何ゆせこまのえ 利合
 昼みあしうりて昔のこけを根 神々
 酒たき干なしくしり 笠垂川 支梁
 けしおとさいて 証教をむ 湖松
 明あさるくさうめふらぬあは 桐溪
 家のくさあを小利なま住ム 嵐成

丁寧よ又 枕灯て送らるし 石菊
 風なす雪の 柳地あつく ちり
 梅の口よ 苦難とらりめいやり 嵐竹
 白みよ 梓のせりしあきさる 此筋
 あまきくしり 少経奢る 月の若 素龍
 けし脚うりりしあまる 新風 千川
 よいことなほけりり 多ぶ菊のあ 楚舟
 流きしり 流るし雨あまら 角蕉
 あるるるるるるるるるるるる 杏村

林屋
執中白髮の初のうたる年川鷗
見開くとをのつゝを花微笑濁子
香をむしんと乾うにこり滄波

奇仙満を普音之吟

こゝむつお便もなりや跡を月杉風
枯きやをよも力もあのおあじし八葉
先ねるを枯柳よそのの終はか子冊

見るとよは既巾をうけん房の松 太太
疾しともぬ秋おや秋のきり別 湖松
菊うれく白を惜む居士衣は 子衣
山菜もむを儼の軒は梅もせん 方湖
うた便もを絶りるをこり 序志
茶のむを白ひも向んて 亀水
ん送るもきりも成りうら秋の葉 李耳
骨肉のうらゆるりくく道は 楚舟
お清く花道を流のちあまか 風弦

悲しき包みしもの本流 枕川
 さだ花をよもむらんを牡丹 妙
 こころぬしや火能あふ苔の下 馬好
 油を思ひよるしのよ向ひ 用陽
 うみみ 粟津らりの 栢柳 杏村
 その體よりやいぢれぬを 石人
 むらやも 苔の枯葉の物 寺り
 あしをぬる繩屋を み あし 新
 神河多 あし 河 も い し 仏 執 向 川 角 蕉
冷波

義仲よく送る悼

水くん 足もぬくこと 海川 季吟
 告る 承て死ねおし あ 山 露沾
 花あ 葉をよと 小春 あ は り 山 夕
 錫杖 や あ ら い る 中 宗 あ 直 方
 泣く こ 目 の あ ら む る あ の こ み 聖 屋
 あ な ら う 橋 は ま へ 塚 の あ 濁 子
 あ ら う あ ら も や 敦 山 西 鏡 壺 蛙
 何 あ ら う 白 い 平 都 母 と う 丸 山 蓬

古巻

九

燈にりしのもや十余年このまゝ 涼葉
 小庭やちりちりもあはれむ力の凍 大舟
 一人の座や十把のたひりき 九板
 繪をかきや神の考の初歩 此筋
 立ふれと心うはる塚のまゝ 千川
 力州引切きくはあまゝは 涸泉
 ちやちやあはれもん笠のまゝ所 支老
 枯葉のまゝ戸あはれ空の系 卜子
 まゝ雨の咲けりもあはれ 捲糸

ちやちやあはれもん笠のまゝ所 支老
 枯葉のまゝ戸あはれ空の系 卜子
 まゝ雨の咲けりもあはれ 捲糸
 こゝろ形見菴の鐘蓋も指の仏 海劫
 何のつゝのぼりゆり戸 捲糸 蓬山
 五十二子ゆりゆり一何のまゝねん ちやち
 形隠れをまゝも神のまゝ 塵谷
 その塚もまゝも枯神のまゝ色 蛸子
 心はまゝも頬も凝つゝ洞うら 馬寛
 風の声もももももももももも 素就

十月廿二日追善

湖春

亦多そやあひたの木原搔

一羽はひしよまゐの朝鳥 葉記

破淫縮する内よ浪おたりと 露沾

妙ふの音此うげる 下山 洋水

舟中のみつにけし霧の登 枕隣

あま夢のちま川上よそり 岫水

ゆきこい物やうらなうんつらぬ 岫坡

あらし雨の末を四五町 孤至

その形は解と巻らる百合のむ 利牛

竈の火きくして居るを家 杉風

まゝのまかいつもきこの死所 素堂

帆をうつ舟はまきしかり 筆下

山後よむらひあつしけ樹と 利合

盆を伝する急なまは静 岫坡

膳所の内片隅をなく思後り 岫水

二途ついでしあつて糸糸 岫水

むらみ葉老るむらさき 押谷 杉風

酒をいそねてかやうく 利牛
 けりもえとわ下る末の奥を 孤を
 立くつとさうら雨の改花 感取
 かあいのたさけは縁の昔 枕隣
 子をの勢のこを拵園 利合
 もこの叔借り返す力 助腹
 高まゑあふよちたのも 杉風
 弱者の時ちさうら 刑牛
 財布をみくよ泪 孤を

の餅の上うかこ 配り縁 出水
 とぬもれと旅 枕隣
 山くを信徳の者 杉風
 本の舟り 飛坡
 さい本の並 孤を
 小わけ 利牛
 ニミ入 磯城
 昔りのれ 感取
 袖 枕隣

さへ優美あるもの夕昏 利合

十月廿三日

晉の亭より奥の

仙化

今もくも雪のなを花の光は

かつたをみよ森と並の鴨

是吉

みよ月黒ふ衣敷ハ影は

介我

抹ひのこせる 階のくさる

柴栗

一よよの拍控こもこそ二や足

湖月

昼の嵐の穴をりあらし

井敷

よの向も世の隙の目をかけ

揚水

かゆふらゝ 征志の音

枳風

供へをらして召さく かなあつ内

由之

雀の枝をさゆる乃あらし

全峯

日よ流さうとあの肩ハ涙も枯

法徳

むらゝのころ 枯平の石

夢下

谷羽をよふるとり 歎く白雲

詠叙

小治中ありしとみつね 扱
 扇はゆねとしむに月つ雪 柴栗
 側はこころの白くをささ 仙化
 むのこしらゆきと舟がしら 扱
 ちいさな松のつねむ側の入 雪下
 ち貝の卓よりあひてをのこ 柳舟
 日光換子似あふ芳飯 柴栗
 かこころを忘れし舟の夜 介我
 りあのおくはたす判字 津敷

ちあくとえする茶入袋し 扱風
 あおと 踵とぬききの襦 津月
 墓のこころをささして懐かき 介我
 ぶを土戸よよむ口元 治徳
 うきもの所をささしつら 仙化
 生しるあををささ入物 扱
 年の月あ鳥帽子の敷の直し 柴栗
 こしらゆきと舟がしら 扱
 色しむるくあゆみの小羊喰 津敷

つらみそ 濁子まらりゆ。 米由之
 肩癢のわらぬまのまじしらんを 仙化
 けしりあし子牛除るるを 介我
 常のえむ連気拵むの花よあ 沾徳
 垣せぬ枕をくしの致まの 湖月

深草のあまの宗代を讀し
 いそよや友^{トモ}風月^{フウゲツ}家^{イヘ}旅^{ツレ}泊^トと
 芭蕉のあまのまのいそよ

旅の縁つらみの宗代の時々の素堂

あまのくくくやあまの巻れ人 沾徳
 爐^{カマド}井^イよあまのくくくあまの巻れ人 沢風
 風よあまのいほせと 猿乃面 介我
 月よあまのいほせと 世の縁 常吟
 梅金といつてあまの巻れ乃面うく 湖月
 風のおよいやまのいほせと 柴栗
 神もくれあまのいほせと 暮子
 かまの月根こいあまのいほせと 拙の
 帰るも菊をまらりくくく 岡指

力州とらりまふしり 乾崙 山蜂
 果ちまゑまゐるまゐり 芭蕉の 寒玉
 十徳の神のあまの 神のま 彩色
 まゐらうお菴女 ちまきこりか 和水
 くの舟やけ十月の世のくま 芝蔴
 さしんくいや 旅ぼく向く 一雀
 鷲さしとまゑの 蜜柑をま向ぶ 是吉
 あさふみのふ向のまぢり 林也
 雪のおまをまゑの 中名付祝 李下

窓乃音はくみ果ある 拂ふ外 亀翁
 青石の陰めめを 木葉を 掻 横儿
 旅の野ま 旅あま けり 霜の杖 景桃
 又もまゑ 跡まき けり 霜の柱 萍水
 ちう〜 舟や 膝を 叩く みる 野坂
 糸の 弦を 掛く 悲し 小時 雨の 孤屋
 油火の 消く 悔む 舟 利牛
 すのき ぼく 桜の 枝る 柳の 疎雨

泣かざるを物々々々の想う合 感水
 深川よりとらひけ 鳴やなるる 石葉
 目のとらまさいしらしや本意を 利合
 義仲寺よりまるとし七師の塚のまじ
 思ふを御くんとに とも隠途の志は
 つらくしつら知のまじしひまのちうめ
 不意な遠里を隔と思ふの草の下
 りむぬしむぬれをまじつらむを

月をふり候の菴西七師 批歌

十一月十二日 初月忌

丸山量阿弥亭 興行

嵐雪

泣中より寒菊ひより耐ふり
 向上躰を 音のぬわは 枕隣
 洪^ヒ坐のひるるを 通く扇をせし 岩翁
 車^カし^サを^ナこ^リ 藪の 置^カナ^リ 晋子
 着賣^カふ^キよ^キ昔^キふ^キあ^キふ^キ 亀翁
 一^キ筆^キと^キ志^キぬ^キし^キ 大^キみ^キ字^キ 横儿

名月み結糸の一種おもひ付ケ 尺艸
 ねろふあほほど廣お相の糸 松翁
 白粉の積よりる糸のク 去来
 火焔ふんころりし中一 正秀
 長谷城の山よわらるる吹るく 曲翠
 榎のふのるれ海をたまたまに 筆
 吹るふん存れを膝ま押し 徹士
 彫くし大わらりあまを 心圭
 のまあうと盃みあまく 暮四

岬をちりしせし舟やらん 巨海
 精魁の衣ぬつころふやどり 荷兮
 湯あがり乃れ氷冷るく 妓童
 戸さうのふもるささるく 風國
 山泉のふ帯氣散く 集加
 郷子の屋うさつる心や花の陰 晋子
 杖と目あふ我老乃も 重勝
 うらぬ和赤やほる田の圃はら 進屋
 塩辛桶くあまく 徹士

雨の日ハちよもあまふらぐらし
 けしこらんこころもるほ目嵐雲
 のうおい香ぬの所の下よあ横儿
 あこめはせとそめまあ縮荷今
 うけもの金とつれももねぬ去来
 上はの算を張く適合尺舛
 舟のあもいらく扇のきしる音
 あもすみさる心浮曲り目岩翁
 うこさる受戒の児乃白糸箱徹士

能くしめごと使とさる家音子
 あい腹の起りあはる板の舟集加
 櫓子めまもねる舟の蔓枕夜
 舟^{ニラ}舟や音坊板のまああ巨海
 衣板の小袖あもるする風玉
 生らる菌きゆらしあゐのひ音子
 こめあめれハあもる言^{シカ}りも尺少
 長旅はあわこらるはさく難言卯
 一日新をうり上る教心圭

きしつらつをを教ふ見出し 桃隣
あの森をわぬあし 岩翁
よぶいともまゝに柱杖 横儿
こま加もまゝに海す 巨海
牛糸をりしころ 尺中
かあげて碑のこもる 進電
おのあし荷ひあふまら 徹士
と年越すまに坂の梯 荷分
肥肉ふのふもまゝ 集加

梵天寒くま 川中を 苦四
物も用を流く光るん 岩翁
不思議な娘をちをうせむ 吉本
白粥のこもる志り 思ひ境 岩翁
舟もこもるももらふ 短天 吾子
こつと四と接境 舟せの 娘此元 娘童
焼あつて干にま 進あこり 徹士
そあつてあこり ころけり 曹月 風玉
をのこのは華をを 獨り 集加

天竺

七

和屋

湖を蘂イケスのみかきる 山の景 尺中

まきとらの字とまの世の額 嵐を

さ月の脚半もとりに膳ツキはし 枕は

とこととをしし蜜柑集り 巨海

かエウららの櫻くららふ梅もて 書四

こしもとら尻あめく飼猿 岩翁

おのツキもかふ兼ツキ端端のまをて 撒士

おひりのあみあふ十念集加

産る丹色もくしふ男の子 音子

とりちりしふるお夕の酒 風を

節まののまをてありし柏みちが 横儿

憐と卯方よ施葉合す 尺中

形よりこころも竹屋のく心 枕隊

尾のちしめねし 著メトハキ 書四

鬼のよみあまきしと雲月の洞 心圭

くハ著るあををかうふあま 尻雪

あせほもあまなく老いお 荷兮

うら門付る垣のゆら 去来

下

上

米^ナうにともやのいこほる規舟 集加
 地を建^レての浮橋 音子
 竿の制れ^レにたおを拵て 岩翁
 ようとつ違ふ藤も木松 漱士
 天井を^レけは^レ家て^レ並なお鞠 尺中
 うね刈に^レ也里のま物 荷兮
 糸の路のほくく^レも^レし^レハ下り 横儿
 お店さ^レハ^レある^レまの版掛 心圭
 後形の行つ^レま^レある^レ糸の月 荒雪

きりりの着よと母のせま^レまく 那童
 赤き^レも^レ痛ハ付属の^レ泥掬ふるも 岩翁
 はあ^レく^レ糸を^レ層^レ星の糸 尺中
 あ^レく^レ赤飯く^レま^レる^レ大井坂 集加
^ウあ^レく^レ糸ある^レ百燈の弓 音子
 日のま^レ心^レは^レい^レある^レ積棒さ 漱士
 脚のま^レ糸^レは^レ拵^レし^レ尺中
 何^レま^レま^レき^レ物^レを^レま^レる^レあ^レけ 心圭
 新^レ大^レ梅^レの^レま^レき^レま^レる^レお 吉兼

赤つゝや切干り尻尾張右 荷兮
 ちろろのやゝぬのカタキ 眞 重勝
 介志々々琴を悲しむ花のお 桃陵
 牡丹一よ 後の 支り 横儿

此一帖者於落柳舎書校合交

